

1) 背景：実践的・総合的な知の術としての「防災」

「防災」は現代日本社会を覆う指揮者無き巨大プロジェクトである。避難や防災教育の重要性が語られ、気象・火山・地震・津波の観測・予報システムは年々改良され、将来の巨大災害の発生確率が喧伝される。技術開発、啓発、訓練、法改正、研究が官民学の様々な領域で展開される。だがマンハッタン計画やアポロ計画と異なり明確な目標や指揮者は存在しない。こうした「防災」がわたしたちの生活と身体に不断に浸透している（高原 2021）。

防災の難しさと面白さは、それが実践的かつ総合的な知の術であるという点にある。その活動範囲は理工学的研究とその実装だけで済むものではなく、社会科学や、市民の生活や習慣や死生観にまで及ぶ。狭義の防災だけでなく、危機管理としての災害対応や「復興」も含めると、緊急時の資源配分、記憶の政治、追悼といった倫理的な課題も現れる。

2) 問い：防災と自然

「自然」はこうした防災の諸実践における基底的な理念のひとつである。しかし防災の諸実践の内部で自然とは何であるかという問いが問われることはほぼない。

現在の「防災」の諸実践で用いられている自然理解として、自然を確率論的・機械論的に理解するものと、自然には「驚異」と「恩恵」の二面性があるとする理解がある。確率論的・機械論的な自然理解は主に理工学的な防災研究で用いられる。発生した災害の自然現象を解析し、また将来発生する自然現象を予測することには適している。しかしこれは被災者や住民の自然理解と同じではないし、死生観や宗教観や偶然性の次元に入り込むことはできない。二面性自然観は防災教育の指針としてしばしば言及されるが、自然をあまりに単純に本質化している。地球温暖化や環境汚染など人間から自然への影響と相互作用が無視されているし、「二面性がある」と言ったところで自然も災害も「恩恵」も説明しえていない。

多様な領域やディシプリンにまたがる「防災」が実践的・総合的な知の術としてはたらくために、災害や生存や復興といった視座から「自然とは何か」という問いを探ることが必要である。本発表はその問いの糸口となる概念を探り出すことを目標とする。

3) 方法と目標：宮沢賢治と寺田寅彦における自然と災害、および「回帰」の概念

自然は西洋哲学史上の重要な課題であり、そこから多くの示唆が得られる。しかし災害という観点から論じたものは少なく、また自然と技術をめぐる議論を防災の諸実践にそのまま持ち込むことは難しい。そこで本発表では、宮沢賢治『グスコブドリの伝記』（1932）と寺田寅彦「津浪と人間」（1933）を対象として、そこに現れている自然と災害の理解を明確化する。『伝記』における災害は、人間と自然の合一の可能性を保ちつつ、人間に他者としての自然との動的な関係を強いるものである。「津浪と人間」では人間の非自然化を通じた災害の克服が説かれるものの、寺田寅彦はそれが不可能だと考えていたかもしれない。以上を検討したうえで、両者の自然=災害観の共通概念が「回帰」であることを示したい。